

# 4. 防災マップ

## 1 防災マップの作成

社会福祉法人菜生保育協会 菜生保育所

(園児数：21名・職員数：5名)

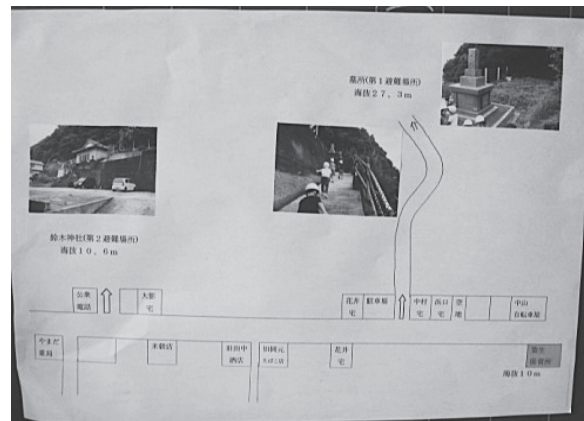
### 1. 園の状況

当所は、室戸市の中心部より東へ2キロメートルの土砂災害警戒区域に位置し、園舎も老朽化しており、平成23年に耐震診断を実施したが耐震性が無いとの結果が出る。保育所は、津波浸水深5～10メートル、津波到達時間20～30分と予測されており、いかに早く安全に避難できるかが重要である。また、地域には高台がないという現状で、保育所から500メートルほどのところにある避難所が現在最も有効な避難場所となっている。津波の被害は免れないと考え、少しでも早く避難ができるように毎月避難訓練を行っている。

### 2. 園での取組

#### 1) 課題

地震が発生した場合、避難場所に避難するため、保護者への引き渡しは、園ではなく避難場所での引き渡しとなる。しかし、当所では約47%の世帯(19世帯中9世帯)が地域外からの入所者であり、保護者が地域に詳しくないため、まず防災マップの作成を行った。そして、保護者へ防災マップの周知を行い、避難場所を確実に知ってもらい、引き渡し訓練等を実施し、子どもを安全に引き渡すことにより、子どもたちが避難している場所がどのような場所かを保護者自身で確認をしてもらうことを通して、防災意識の向上に取り組んでいる。



(防災マップ)

#### 2) 防災マップ作成と周知

防災マップは、避難場所までの要所を写真に撮り、地図は手書きをして模造紙に貼り付け作成した。そして、保育所の掲示板に掲示し入園式で紹介するなど、周知を行った。掲示にあたっては、多くの皆さんが日常的に目に触れる場所ということもあり、屋外の掲示板を活用した。しかし、屋外ということもあり、次第に写真も色あせ劣化したため、本年度4月当初に防災マップを再作成し、新しいマップを掲示板に掲示し周知を行った。避難場所までは近い距離にあるが、地域外の保護者にも出来るだけ分かりやすいように、急傾斜地なども明記するなど大切なもののみ大まかに書き記すよう留意し作成した。その後、引き渡し訓練を実施した。(表1)

最初、園児は、ヘルメットや防災頭巾の着用にとっても抵抗があり、嫌がって時間もかかっていたが、毎月の訓練で回数を重ねる中で嫌がらずスムーズに着用できるようになり、その様子なども保護者に伝えた。

保護者からは、「回数を重ねて訓練することの大切さがすごくよく分かった」、「いつでも避難できるようにシューズも履かせておかなければいけませんね」といった感想が出さ

れ、保護者の防災意識の向上が認められる。一方では、「園舎からは近いが道幅も狭く、周りは古い民家があり、もし地震が起こった時には実際に避難できるのか」という声も上がった。また、「高さ的には津波の心配はないが、子どもたちをスムーズに迎えに行けるか不安」といった率直な意見も出された。

### 3. 今後の方向性

職員数も少なく避難車も使えない現状でいかに乳児を安全かつスムーズに避難させるか、また、避難場所は高台にあるが土砂災害警戒区域であるため、より安全な避難場所の確保などについて今後も引き続き検討していくこととしているが、子どもたちの命を守っていくためには、園舎の高台移転の検討も必要である。「安全・迅速・より高く」を大切に、子どもたちを安全に避難させるように日々訓練を重ねていきたいと考えている。

表1 実施記録

防災・防火避難・消火訓練実施記録（平成25年度）

訓練実施日時	4月19日（金）	消防立会	天気	確認印		
	10時00分	有・無	晴	園長		担当
想定出火場所	地震により調理室より出火					
放送係	〇〇〇〇					
確認係	〇〇〇〇					
通報係	〇〇〇〇					
消火係	〇〇〇〇					
避難誘導係	〇〇〇〇・〇〇〇〇・〇〇〇〇					
搬出係	〇〇〇〇・〇〇〇〇					
避難実施状況	避難完了に要した時間		20分 秒			
	地震想定による防災訓練の実施。（保護者への引き渡し訓練） 地震発生の場合そばにいる保育士の指示に従い机などの下に一時避難を行う。揺れが収まり避難の場合とともに、保育士の指示に従い所定の場所に避難する。人数確認を行い報告後、地域の避難場所（保育所近くの墓所）に避難する。避難後待機時の注意事項などを聞き、保護者が迎えに来てくれるまで待機する。保護者が来た順に引き渡しカードに記入し、確認を行い引き渡す。引き渡し後は、保護者は子どもを保育所まで連れて帰ってもらう。その後、全園児が、調理室からの出火の想定で消火訓練に参加、訓練を終了する。					
反省及び効果	地域避難場所（保育所近くの墓所）での保護者参加による引き渡し訓練は初めてであり、避難場所までの坂が急であることから保護者からは、避難に大変という声も聞かれた。高台にあることからここまで避難すれば津波の心配はないだろうという声や訓練に参加できてよかったという声も多く聞かれた。					
消防署指摘事項	※消防署等の立ち合いがあった場合のみ記入					

## 2 防災マップの活用と引き渡し訓練

### 社会福祉法人ふるさと自然村 後免野田保育園

(園児数：105名・職員数：21名)

#### 1. 園の状況

当園は、ごめん・なはり線後免町駅の北に位置し、園児数105名、職員数21名の園である。平成20年・21年と耐震診断を受け、耐震工事を行った。当園は、地震が発生した場合津波浸水区域外にあるが、近隣建物が老朽化により倒壊する恐れがある。周囲は家や学校があるものの、田畑もあり、視界が良く比較的広く感じられるが、地盤のゆるみや道路の寸断、橋の倒壊が予想される。一方、保護者の勤務先が広範囲にわたるため、地震が発生した場合には保護者の迎えが困難な家庭もあり、数日は子どもを園で預かることが予想される。

#### 2. 園での取組

##### 1) 課題

園での子どもたちの安全を確保するための避難体制の確立と合わせ、地震が発生した場合混乱した状況の中で、安全に子どもたちを保護者に引き渡す体制も同時に整えておくことが必要である。そのためには、保護者はどのような方法で迎えに来るのか、誰が迎えに来るのか等を把握したうえでの引き渡し方法の体制整備が必要である。そこで、当園では、子どもたちの居住地区を示した防災マップや引き渡しカードなどを見直すとともに、引き渡し訓練を行い、より確実に子どもたちを保護者に引き渡すための体制づくりを進めている。以下にその取組について紹介する。

##### 2) 防災マップ作成

安全に子どもたちを保護者に引き渡していくためには、まず、子どもたちがどの地域に居住しているか、子どもたちが居住している地域は津波浸水予測地域ではないか、地盤軟弱地域ではないか、保護者が自宅から迎えに来るとき道中に危険な箇所はないかなどを把握することを目的に、防災マップを作成した。作成方法は、地図の表面にビニールシートを掛け、その上から、クラスごとに色分けしたシールを用い、園児の自宅の場所に貼り付けて、どこから通って来ているのか、浸水地域に住む園児はどれだけいるのかなどについて確認できるよう地図上に示した。クラスごとにシールを色分けしたことで、子どもたちの散らばりが分かるとともに、次年度作成するときには、卒園児のシールだけを外し、新入児(0歳児)がその色を使えば、毎年作りかえる手間を省くことが



(子どもの住居を記載した防災マップ)

でき機能的でもある。

この防災マップを作成したことにより、保護者が迎えにきて引き渡す際、園が把握している地震の最新の情報に加え、自宅に帰る際に危険と思われる箇所などの情報を伝えることができる。また、状況によっては、園に留まることを助言するための資料ともなる。

現在の防災マップは、園児の居住地のみがわかるものになっているが、迎えに来る保護者の勤務地等の他、園児引き渡し後に家族で避難する2次避難場所についてもマップ中に記載があればよいという意見もあり、改善を加えていきたいと考えている。

### 3) 引き渡しカードを使った訓練

園での避難訓練はある程度定着したものの、子どもを安全に保護者に引き渡すためには、幾度も訓練をする必要がある。仕事等の関係で引き渡し訓練に参加できない保護者もいることから、保護者との合同訓練をどのように実施するか、保護者に災害に対する危機感を持ってもらうためにはどうしたら良いか、そのためには園でどのように働きかけをしていけば良いかを考えていくこととした。また、当園は避難場所に指定されており、地域の方の安全も確保しなければならない。そんな状況になった時、より確実に子どもを保護者に手渡すために引き渡しカードの活用とその手順を考えることとなった。

まず、カードの使い方とその用途について詳しく書いた手紙を渡し、あらかじめ家庭で記入をして持ってきてもらった。その際、家庭での避難場所が確定していない家庭もあったので、再度確認をしてもらった。そして、保護者とカードを用いた訓練ができる機会を検討し、親子遠足で行うこととした。

遠足場所は春野運動公園である。広い敷地に全家庭が集まり、ここが避難場所という設定で、引き渡しカードを使用した。あらかじめカードはきょうだい児がいる場合、年下児のクラスの方から子どもを引き取り記入してもらうことを伝えておいた。引き渡しは、約10分程度で全家庭が終了することができた。



(親子遠足で行った引き渡し訓練)

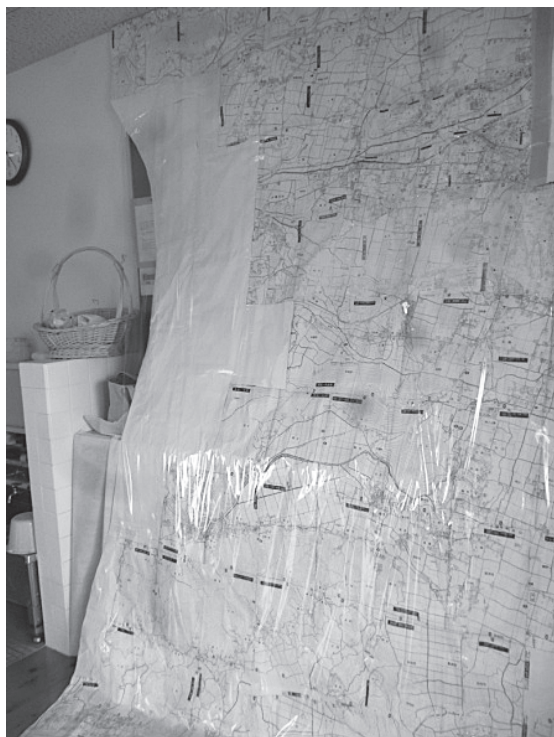
実際は、園での引き渡しとなるため状況は違ってくるが、その方法等については保護者も理解できたようである。この引き渡し訓練後、引き渡しカードについて以下の改善を加えた。

- 園にインターネットを取りつけていないため、メールアドレスの部分を引き渡しカードの記入欄から外す。
- 緊急時の連絡先を3名から5名に増やす。
- 避難先で体調管理をする際に必要な特異体質（アレルギー等）の欄を設ける。
- 引き渡しの際、カードを取り出しやすいように家庭ごとにまとめた上で、あいうえお順にまとめる。

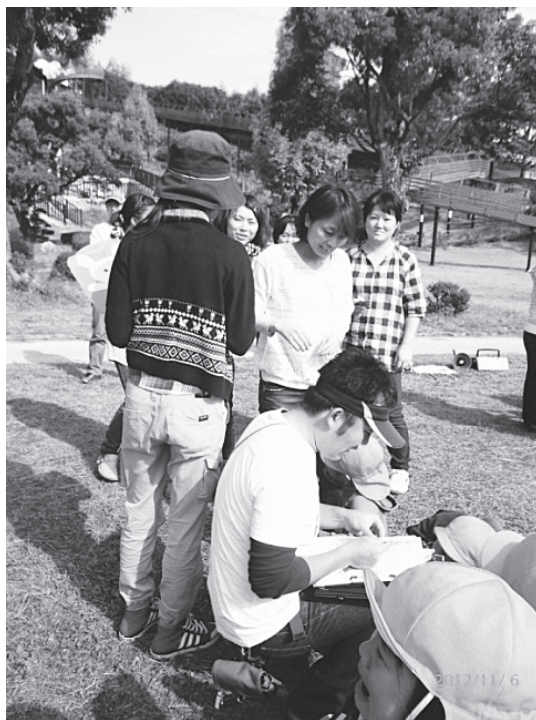
防災マップや引き渡しカードは、作成して終わりではない。大切なことは地震が発生した場合、これらのものがいかに有効に活用できるかということではないだろうか。今後も、実際の訓練等を行い、評価・改善を加えることにより有効性の高いものへとしていきたいと考えている。

### 3. 今後に向けて

園だけが危機意識を持つのではなく、保護者も同様に危機意識を持ち、両者の共通認識のもとで、子どもたちの命を守っていかなければならない。そのためには、実際に家庭でカードを記入してもらったり引き渡し訓練に参加してもらったりを通して地震への危機意識を持ってもらえるのではないだろうか。また、訓練実施後には、保護者から意見を聞くことで、多様な視点から訓練を振り返り、職員同士でどうやったら混乱を最小限にできるかなど意見を出し合い次へとつなげていきたい。さらには、こういった園での取組を公開し、家庭だけではなく、学校や地域住民と連携し、合同訓練なども取り入れ、意見交換・問題点などを話し合い、緊急時に備えていきたいと思っている。



(防災マップ)



(引き渡しカードでチェック)

## 3 防災マップの作成

### いの町立 吾北幼稚園

(園児数：12名・職員数：4名)

#### 1. 園の状況

当園は、高知県吾川郡いの町北部仁淀川上流の山間部にあり、海拔104メートルの位置に立地している。園児数12名の小規模園である。平成23年12月に保育園が新しく併設された。当園の園舎は昭和57年に建築されたが耐震性有りとの診断を受けている。平成24年に保育室の窓ガラス、鏡に飛散防止フィルムを貼り、蛍光灯に飛散防止カバーを取り付けた。当園は、地震が発生した場合津波浸水区域外であるが、山間地域にあり国道が崖崩れのために不通になる可能性がある。園児は隣接する小学校校庭に1次避難し、小学校体育館又は八社川内神社に2次避難する予定だが、広範囲から通園してきているために、国道が不通になった時には保護者がすぐには園又は避難場所に迎えに来ることができない可能性がある。

#### 2. 園での取組

##### 1) 課題

これまで危機管理マニュアルは作成していたが、防災マップは必要性を感じながらも作成していなかった。そのために、園周辺のマップが無いか役場の吾北総合支所の防災担当者に向ったところ、吾北地区で自主防災組織を徐々に立ち上げてきており、自主防災組織が作成した物があるということであった。そこで、周辺の地図やどこに何が設置されているのかを把握しておくためにも、是非当園のマニュアルに防災マップを付け加えたいという相談をしたところ、快く引き受けてくれ、園舎等を入れたマップを作成してデータを送ってくださった。

##### 2) 防災マップの作成

職員はほとんどが地域外から通勤しているために、地域のことを詳しくは知らない者が多く、全員でマップを見て避難経路や地図に記載されている消火栓・防災倉庫・防火水槽などの消防施設、危険箇所などがどこにあるのかをチェックした。また、実際に職員で地域を歩いてその場所を確認し、散歩に出かける際に園児と一緒に確認したりしたことにより、次の改善につながった。

- これまで2次避難場所としていた八社川内神社までの道は落石・土砂崩壊等危険箇所であることがわかり、2次避難場所は八社川内神社を取り止め、小学校の体育館とした。
- 地域外から通勤している職員も、吾北の地形や何がどこにあるといった地域の様子を再確認することができた。
- 幼稚園が作成したマップを小学校も活用している。

今回の防災マップの作成を通して、地域を改めて知る機会となり、より地域の実態に応じた避難体制が構築できるようになった。

表 1

近隣の自主防災会「防災マップ」

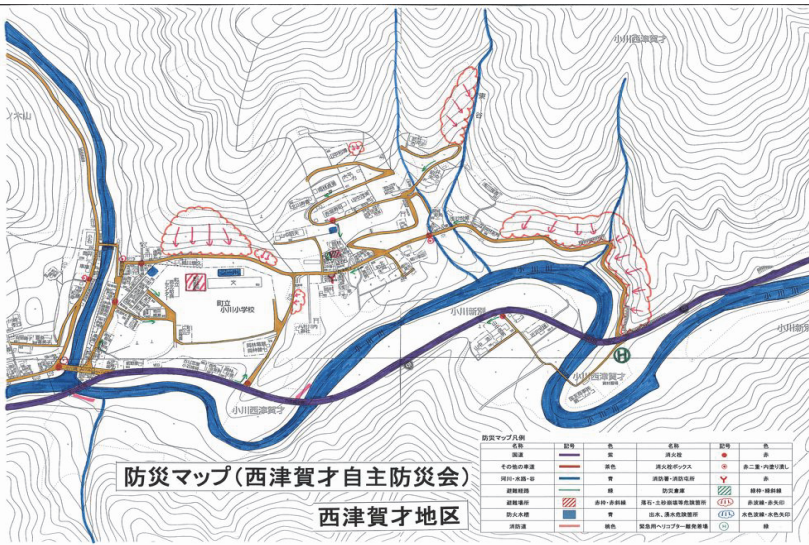
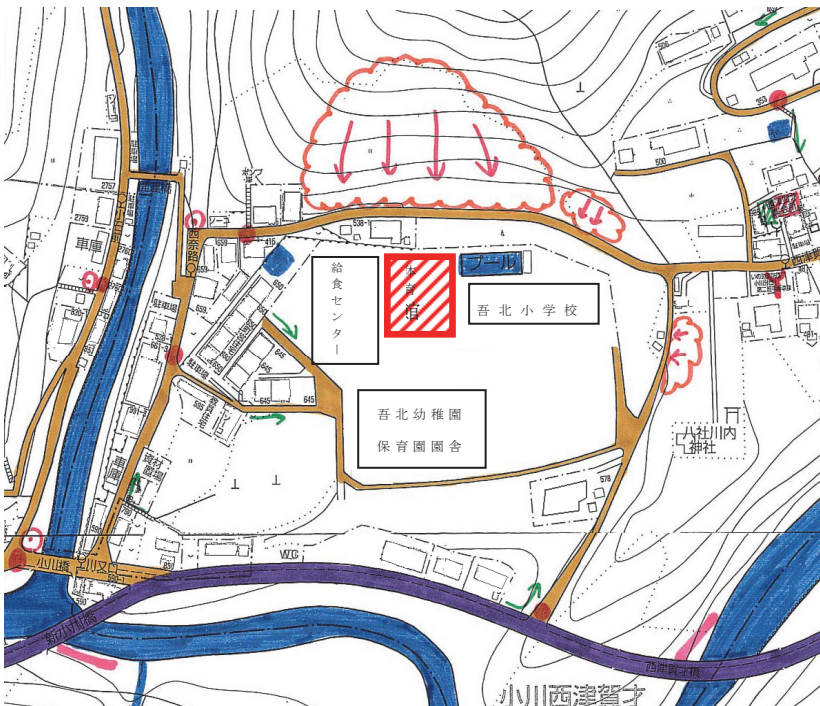


表 2

保育園・幼稚園・小学校周辺抜粋



名称	記号	色	名称	記号	色
国道	—	紫	消火栓	●	赤
その他の国道	—	茶色	消火栓ボックス	⊙	赤二重・内塗り黒し
河川・水堀・谷	—	青	消防署・消防電所	Y	赤
避難経路	—	緑	防災倉庫	■	緑斜線
避難場所	■	赤斜線	海石・土砂崩壊等危険箇所	⊕	赤波線・赤矢印
防火水龍	■	青	出水・湧水危険箇所	⊕	水色波線・水色矢印
消防道	—	緑色	緊急用ヘリコプター離陸着陸場	⊕	緑

3. 今後に向けて

これまで役場の防災担当者とは直接つながりが無かったが、今回防災マップ作成のために園の趣旨を理解し協力していただいたことによって、役場及び自主防災組織とのつながりができ、災害が起こった時に助け合えるという安心感をもつことができた。今後も連携を深めながら、災害時に協力しお互いが助け合えるように、避難場所や避難方法の確認、備蓄品等についての具体的な話し合いや合同の避難訓練を実施する機会を設けていくようにしたい。また、このマップを保護者と共有して、もしもの時のお迎え等にも役立てたいと考えている。